平成29年度 卒業論文

乳幼児に対する プレパレーションの効果の検討

こども心理科

- 15K-0005呉 有華
- 15K-0013正木 康世
- 15K-0016渡辺 夏奈

目次

1. 背景	1
2. 研究目的	2
3. プレパレーションとは	3
4. 方法	4
①アンケート調査	4
②プレパレーションの実施(予備実施)	6
③プレパレーションの実施(本実施)	8
5. 研究結果	9
①アンケート調査の結果	9
②プレパレーション実施の結果(予備実施)	10
③プレパレーション実施の結果(本実施)	12
6. 考察	12
7. 結論	20
8. 謝辞	21
9. 参考文献	22
10. 図 表	23
1 1. 要約	31

1. 背景

小児医療の現場では、恐怖や不安などから医療行為への拒否が多くみられる。その際、 手術や注射など痛みを伴う処置に対しては、プレパレーション(治療や検査を受ける子ど もに対し、事前に処置について説明を行い、子ども親の対処能力を引き出すようなかかわ りを行うこと)が実施されることがあり、恐怖や不安軽減効果が明らかとなっている。ま た、昨年本学科で実施した注射時に子ども自らができる遊びを提供することで注射への気 を逸らすかかわりである能動的ディストラクションも有効性が確認された。しかしながら、 現場では、痛みを伴う治療だけでなく、聴診器を当てる、舌圧子を用いての咽頭視診の際 にも多くの子どもが泣き叫ぶなどの拒否の様子を示す。

2. 研究目的

したがって、本研究では、痛みを伴わないそのような診療の際にも、保育の専門性¹⁾ を活かした簡便なプレパレーションを行うことで、子どもの拒否反応や心理的ストレスを軽減できるのではないかと考え、検討することとした。

3. プレパレーションとは2)

入院生活や治療・処置・検査などによって生じる可能性のある子どもの不安や恐怖を最小限化し、子どもの心の準備を整え主体性を支えることである。子どもがこれまで体験してこなかった医療行為や環境の変化などに対して時期や方法について遊びを通して説明行い、子どもを中心に考えた安全で安楽なケアのことであり、子どもの発達段階や個別性にそって、絵本、ビデオ、人形など子どもが親しみやすいツールを使って行う。プレパレーションの本質は子どもの権利を守ることにあり、子どものQOLを向上させるための理論的な行動でもある。プレパレーションには事前に行う説明、処置中に子どもの注意を医療処置以外のことに向けるディストラクション、また処置後に人形などを通して医療処置を受けていた自分の状況を見直し、不安や恐怖心を乗り越え次回の医療処置への心構えを作っていくメディカルプレイがあり子どもの処置や病状に合わせ行っていくものである。

4. 方法

①アンケート調査

<対象>

保育所の保護者、地域の保護者、学校内の育児中の先生、合計 176 名

<実施場所>

都内の保育所5ヶ所、専門学校1ヶ所

<実施期間>

2017年10月12日~10月26日の2週間。

<調査方法>

子どもが病院やクリニックでの診察時に、どのような場面において嫌がったり泣いたりする拒否反応を示すかについて問うアンケートを行った。質問項目は全て、現在・過去を問うものであり、内容は以下のとおりである。

回答者 () 歳 男 女 お子様の年齢 () 歳 男 女

以下、お子様についてお尋ねします。

(1) お子様は病院や診察を怖がりますか。

現在: はい いいえ

過去: はい()歳頃 いいえ

(2) お子様が嫌がる診察内容はありますか。

現在: はい いいえ

はいと答えた方にお聞きします。どのような診察内容でしたか。当てはまるものに ○をつけてください。(**複数回答可**)

- 1. 聴診器を当てたとき 2. 口内を視診するとき 3. 吸入処置
- 4. 吸引処置 5. 注射(点滴を含む) 6. その他(

過去: はい()歳頃 いいえ

1. 聴診器を当てたとき 2. 口内を視診するとき 3. 吸入処置

4. 吸引処置 5. 注射(点滴を含む)6. その他()(3) お子様が診察を受ける際に、工夫している言葉掛けや関わり方などについて何かあれば記入してください。

例)大丈夫よと声をかける。安心できるよう頭をなでる。

②プレパレーションの実施(予備実施)

<対象>

診察が苦手な2~3歳の男女児 3名 (男児2名・女児1名)

<実施場所>

都内の専門学校の実習室

<実施期間>

2017年11月21日 1人15分程度

<手続き>

待合室で待っている間、口内の観察と聴診のプレパレーションを行った。その際、口内の観察では舌圧子をアイスの棒に見立て行った。(図1)具体的には、学生と一緒にアイス屋さんごっこ遊びを楽しみ好きなアイスのカードを選ぶ。(図2)診察室に入った後、選んだアイスを医師役に伝え、医師役は子どもが選んだアイスのカードを腕(のゴム)につけ、子どもがアイスに注目できるように声を掛けながら口内の観察を行った。(その際、保護者にも声掛け等を行って頂く)

また、聴診については、待合室で聴診器にドキンちゃんをつけてお医者さんごっこを行った。(図3) 具体的には、学生と遊びを行い、子ども自身が聴診器を使って医師になりきることで、聴診器への恐怖心を和らげ、診察室でどのようなことをするのか理解できるように促した。(図4)

いずれも、子どもの好きなものと診察を関連付けることで、診察への抵抗感を払拭することを目指した。

対象年齢の設定については、保育所保育指針第 $\hat{\mathbf{p}}^{5)}$ により、見立て・ごっこ遊びが可能になる 2 歳からとした。

実施を以下の順序で行った。

- ① 予備実施に協力してくれる子どもと保護者に、目的・方法・流れについて説明し、 同意を得た。この際、保護者に調査前のアンケートを行った。内容は以下のとおり である。子どもは絵本やブロックなどコーナーで遊んで待つ。
 - Q1.病院の雰囲気を嫌がりますか?
 - Q2.どの様なときに拒否反応を示しますか?
 - Q3.口内視診と聴診器を当てた際にどのような反応を示しますか?
- ② 子どもにアイス屋さん、お医者さんごっこを用いたプレパレーションを行った。
- ③ 実際の病院を想定して1分程度の待ち時間を自由に過ごしてもらった。
- ④ 学生が子どもの名前を呼び、診察室へ誘導した。

- ⑤ 医師役は医師になりきり、診察のデモンストレーションを行った。この際、医師役と保護者は子どもに合わせた声かけを行ったが、保育士役の学生はあまり声をかけないようにした。医師役は子どもにアイスのツール(図1)を見せ、「どのアイスがいい?」とアイスを選ぶように促した。子どもの選んだアイスを医師役は腕につけ(図5)口内視診を行った。聴診器を当てるときは、「アンパンマン見ててね」などと声をかけ行った。診察のデモンストレーション終了後は退出するよう促した。
- ⑥ 退出後、保護者へのインタビューを行った。内容は以下の通りである。この際、子どもはコーナーで自由に遊んだり、保護者の隣に座ったり自由に過ごして待ってもらった。
 - Q1.普段の病院での様子と今回の実施での子どもの様子の違いはありますか?

③プレパレーションの実施(本実施)

<対象>

拒否のある1~3歳の男女児 3組5名 (男児3名・女児2名)

<実施場所>

都内小児科クリニック

<実施期間>

2018年1月11日 1人15分程度

<手続き>

予備実施と同様にアイス屋さん、お医者さんごっこを行い診察への抵抗感を払拭することを目指した。

また、人見知りや場所見知りをする児に対しては、軍手人形(図 6)や子どもの洋服の キャラクターに触れたりすることで簡単なコミュニケーションを行ってから実施するよう 心がけた。

実施を以下の順序で行った。

- ① 本実施に協力してくれる子どもと保護者に予備実施と同様に、目的・方法・流れ について説明し、同意を得た。この際、保護者に予備実施と同様の調査前のアン ケートを行った。
- ② 子どもにアイス屋さん、お医者さんごっこを用いたプレパレーションを行った。
- ③ 先生が診察室に呼ぶまでその場で待っていてもらった。その際、子どもはぬりえ をしたり、保護者の膝の上で待っていた。
- ④ 診察室に呼ばれると、医師は笑顔で子どもと保護者を迎え入れ診察を始める。この際、医師役と保護者は子どもに合わせた声かけを行ったが、保育士役の学生はあまり声をかけないようにした。医師役は子どもにアイスのツール(図1)を見せ、「どのアイスがいい?」とアイスを選ぶように促した。選べない子どもに対しては保護者が声を掛け一緒にアイスを選んだ。子どもの選んだアイスを医師役は腕につけ(図5)口内視診を行った。聴診器を当てるときは、「アンパンマン居るよ。見ててね」などと声をかけ行った。
- ⑤ 退出後、診察後に吸入処置等が行われるため、保護者の時間が許される範囲で普段との様子の違いや、表情の違いについて可能な限り予備実施と同じ内容のインタビューを行った。その際子どもはぬりえや絵本など病院に設置されている玩具等で遊び自由に過ごして待ってもらった。

5. 研究結果

①アンケート調査の結果

アンケートを調査の結果では、1位は注射で全体の 35%を占めた。2位は吸引処置 28%、 3 位は口内視診 17%、4位は吸入処置 12%、5位は聴診器 4%、6位は病院の雰囲気 などその他の意見 4%であった。このことから注射や吸引処置、つまり痛みを伴う処置や 検査が全体の 2/3 を占めたが、残りの 1/3 は痛みを伴わない処置に対し拒否反応を示すこと が分かった。(図7) 普段診察で必ず行われている口内視診や聴診器にも拒否を示している ということである。そこで、本研究では、この口内視診と聴診器に対してもプレパレーシ ョンを行うことでこどもの不安やストレスを軽減することができるのではないかと考えた。 また問2の集計により現在は聴診器や口内視診を嫌がらないが、乳児期に嫌がっていたと いう子どもが多いことも分かった。問1と問2より乳児期の子どもが普段診察で行われて いる痛みを伴わない処置に多く拒否を示すことが分かったため対象年齢を1~3歳にした。 アンケート問3の診察前の子どもとの関わりについて集計したところ計234の回答を頂 きそれらを種類別にわけた結果は次の通りである。1位 安心できる声掛けをする88名、2 位 手を握る、抱っこなど身体に触れる 46 名、3 位 病院の絵本など環境設定を使う 41 名、4位 ほめる、ごほうび36名、5位 事前に説明をする23名となった。このことから 子どもに対して保護者は慣れない環境や処置に対し子どもが安心できるような関わりをし ていることがわかる。しかし事前に病院に行くことや、どのような診察を受けるかについ て説明することは少ないということが分かった。

②プレパレーション実施の結果(予備実施)

・A 児 2 歳 1 ヶ月 男児(17:05~17:18)(図 8。1-4)

保護者への調査前のアンケートでは、普段の診察時には怖いという認識がある行為、例 えば注射をされるときなどには拒否反応を示す、嫌なときには泣く、口をあけない、親か ら離れないなどの行動がみられることがわかった。

待合室では、絵本を読んだり車の玩具で遊んだりしていた。プレパレーション時も笑顔で保育者の話を聞き集中して遊んでいた。アイス屋さんごっこでは、アイスに興味を示したり自身の靴下にいる恐竜にアイスをあげる行為、また"あいすー"など喋りながら楽しそうにしていた。お医師さんごっこでは、聴診器に興味心身で自ら手を伸ばしたり、保護者に誇らしそうに聴診器を見せたり、積極的にごっこ遊びを楽しんでいた。診察中では、入室時から真顔になり不安そうにするものの、1人で椅子に座り保護者の声かけでアイスを選ぶことができた。診察時は医師が持っているアイス、腕につけたアイスをじっと見てよだれをたらしていた。退出時には医師がタッチを求めると医師の顔を見てタッチをし、待合室に戻ると誇らしそうな表情や笑顔が見られた。

その後の保護者へのインタビューでは、いつもとの雰囲気の違いに戸惑っている様子は あるが診察を嫌がっている様子は見られなかった、いつもよりも積極的に診察を受けてい たという話を聞くことができた。

・B 児 3 歳 3 ヶ月 女児 (17:20~17:25) (図 9。1-4)

保護者への調査前のアンケートでは、普段の診察時には注射のときに泣くことがあり、 聴診器をあてた時は緊張している様子が見られたり目をつぶることがあるといった行為が みられることがわかった。

待合室では、普段から仲のよい姉と遊んだり積み木で遊んだりしていた。プレパレーション時は保育者の顔をじっと見たり、母に"どーぞ"とアイスを渡したりごっご遊びに意欲的だった。入室後も自ら椅子に座りアイスをじっと見たり、聴診器を向けられると自発的に洋服を上げようしたりする様子が見られた。退出してからも笑顔だった。

その後の保護者へのインタビューでは、いつも嫌がって目を閉じるが今回はずっと目を 開けていた、いつもより意欲的な様子だったという話を聞くことができた。

・C児 2歳2ヶ月 男児 (17:45~18:00) (図10。1-3)

保護者前への調査前のアンケートでは、場所見知りがある、病院に入ることを嫌がる、 待合室では、笑顔で遊んでいた。プレパレーションを実施しようとしたが遊び足りない 様子で学生が促したごっこ遊びには興味を示さなかった。保護者が絵本で気をそらしたり、 「おいしそうなアイスあるよ」など声をかけると反応をし一度目にするものの先へとは繋 がらなかった。その為、診察室に入り医師役とでアイスを選ぶこと、聴診器にはアンパン マンがついていることを伝えるのみとなった。入室を促すとすぐ拒絶反応を示し暴れた。 遊んでいた車の玩具を一緒に持っていくことを提案するが拒否する。保護者、医師、保育 者の声かけにも拒絶し、退出後のちに泣き止んだ。いつも診察後に飴をもらっているよう で、自ら飴を探し出した。その後の保護者へのインタビューでは、いつも病院入り口で拒絶し看護師に迎えに来てもらっている、ずっと泣いているが今日は病院と感じなかったのか自然に遊んでいた、2週間前の予防注射を思い出したと思う、アンパンマンとアイスは好きという話を聞くことができた。C児は落ち着きだし、保育者のエプロンについているアンパンマンを指したり、帰る際にはタッチを保育者に求めたり笑顔が見られた。

③プレパレーション実施の結果(本実施)

① D 児、E 児 (2歳1ヶ月 男児):双子

隔離室入室時 E くんが泣き始め D くんがつられてなきだしてしまう。

抱っこされ座った \mathbf{D} くんは学生が軍手人形を使い関わると泣き止んだ。学生が始めたプレパレーションのアイスに興味を持ち選び手に持つ。聴診器のドキンちゃんにも興味を示し聴診器に触れる。 \mathbf{D} 児のペースに合わせプレぱレーションを行う。プレパレーションが終わると学生とハイタッチをした。 \mathbf{E} くんはプレパレーションを拒絶し行うことができなかった。隔離室を出ると \mathbf{E} くんは泣き止んだ。診察時、 \mathbf{E} くんが抱っこをされ診察を受ける。医者の「アンパンマンいるよ」の声掛けに興味を示し静かに診察を受けた。口内の視診は口を開けるが舌圧子を嫌がった。 \mathbf{D} くんもアンパンマンの聴診器に興味を持ち静かに受診した。口内視診は行われなかった。退室時には笑顔をみせ医者や学生に手を振りハイタッチをした。退出後インタビューを行うと \mathbf{D} 児 \mathbf{E} 児は隔離室に入ったことがないため場所見知りをし普段より泣いていたということだったが診察時にはアンパンマンを見つけ安心した様子をみせ上手に診察を受けた。と話をきくことができた。

② F 児 (3 歳 6 ヶ月 女児)、G 児 (1歳 女児): 姉妹

待合室でぬりえをしていた下ちゃんに学生が軍手人形を使い関わり始めると笑顔を見せる。プレパレーションを始めるとアイスに興味を持ち色々なアイスを使って人形に向け意欲的に遊ぶ。下ちゃんに向けて学生が「アイスあーん」と声を掛けると大きな口を空けていた。「お医者さんにも大きなお口あーんしようね」と声を掛けると頷き、笑顔を見せる。聴診器を見せるとすぐに手を伸ばし耳ではなく首に付けると人形に「もしもし」と上手に当てて遊ぶ。聴診器をつけている姿を保護者に見せ嬉しそうにしていた。プレパレーションを楽しんで行った。妹のGちゃんも下ちゃんの横に座り笑顔を見せながらプレパレーションをよく見ていた。Fちゃんは診察に向かう際「レッツゴー」と言い入室した。医者とアイスを選び、口内視診では「アイスあーん」の声掛けで自ら口を大きくあけ上手に口内視診を受けた。聴診器のアンパンマンにも興味を示し静かに診察を受けた。妹のGちゃんは口内視診を嫌がり泣きそうになるが下ちゃんのプレパレーションをよく見ていたため「アイス見て、アイス食べよう」の声掛けで自ら口を開け口内視診を受けることができた。聴診器のアンパンマンにも興味を示し安心して診察を受けた。退室時は二人とも笑顔を見せていた。退出後すぐに処置があったためインタビューを行うことはできなかった。

③ H 児(2 歳 11 ヶ月 男児)

隔離室に入り少し不安な様子を見せる。母に抱っこしてもらいプレパレーションを始めるとアイスに興味を持ち、学生の「アイスあーん」の声掛けに舌を出し舐めるふりをした。聴診器のドキンちゃん見るが遊ぶことはできない。学生が「お医者さんのもしもしにはアンパンマンいるからね」と声を掛けると表情が少し和らぎ隔離室を出る。診察室にも泣かずに入り医者が「アンパンマンついてるよ。」と声を掛けると聴診する際、自ら腕を上げ万

歳をしながら上手に受診する。口内視診では医者とアイスを選んだ。普段母親が身体を抑えるのだが「アイスあーん」の声掛けで自ら大きな口を空け、身体を支えず上手に受診した。退室時は安心したような表情をみせ退室した。退出後インタビューを行うと隔離室に入ることが初めてだったため、不安そうな様子は見せたが、今回の診察で初めて身体を支えなくても上手に診察を受けることができていた。と話を聞くことができた。

6. 考察

A 児と B 児は日頃の診察時に比べ、自発的に洋服をあげたり積極的に診察を受けていたりとプレパレーションの有効性が確認された。C 児はプレパレーションに興味を示さず実施することができなかった。A 児 B 児については、象徴機能の成立に合わせたアイス屋さんやお医師さんの見立て・ごっこ遊びで関わったことが効果の発揮に繋がったものと考えられる。一方 C 児については、プレパレーション開始時から言動に不安定さがみられ、プレパレーションの導入が困難だった。

クリニックでの本実施においても、診察の際に自ら口を開けたり、手をバンザイするといった積極的な受信が見られ、プレパレーションの有効性が確認された。これもまた、象徴機能の成立に合わせたアイス屋さんやお医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わりが効果の発揮に繋がったものと考えられる。

また実施の際は、子どもの注意集中が途絶えないよう個人に行うことの重要性も示された。そのような中でも、子どもの不安定さが見られた場面もあった。人見知りや場所見知り、感情など対象児の状態の詳細な把握が不可欠であることが明確になった。プレパレーションの導入のタイミングや事前のアセスメント、対象児に合わせたアイス屋さん・お医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わりをすることで、より効果的なプレパレーションが可能になるものと考える。

さらに、F・G 児の結果から一連のプレパレーションの効果は、側で見ている子どもにも潜在的に影響を与える可能性も示された。

本実施後、今回のクリニック実施に協力いただいた医師からの要望により、今後の診察時に使用するため、本研究で使用したツールを提供した。医師は直後からツールの使用を開始し、診察室からも「アンパンマンだー」「アイスだよ」などの楽しそうな声が聞こえてきた。

【個人考察】 15K-0005 呉 有華

今回、痛みを伴わない処置に対しても、子どもの状態を考慮してプレパレーションを行う ことが有効である可能性が示唆された。学校で行われた予備実施、そして小児クリニック で行われた本実施においても子どもの象徴機能の成立に合わせたアイス屋さんやお医者さ んの見立て・ごっこ遊びでの関わりが効果の発揮に繋がったものと考えられる。

初期のふり遊びには、自己を他者に示すといった発達が関わっている。他社に向けたふりはメタ表象能力(現実を映し出したものとして理解する能力)の発達に繋がっていること、ふり行為の連鎖にみられる結合能力は行為主と行為の関係づけと意味の拡張によってなされていることが考えられた。また、役割のふりが見立ての柔軟性と並行して発達することや、象徴遊びの場で、現実経験と結びついた予測やプランニングといった認知発達が遊びの中で促進され、心の理論や言語発達に繋がっていることを指摘した。初期の象徴遊びは、さまざまな物への子どもの志向性を高め、見立ての柔軟性と関連していると考えられた(小山、2012)。プレパレーション時には、目に見えているそのままでものを扱うのでなく、子どもが興味を持つようなものに見立て扱うことが望ましいと考えられる。

また、プレパレーション実施の際は、子どもの注意集中が途絶えないよう個別に行うこと の重要性も示された。今回小児クリニックで実施を行った際に、双子の兄弟に協力してい ただき、同時にプレパレーションを行ったのち、診察から退室するまでの様子を観察した。 プレパレーションを行うと一方が興味を持ち始めるがもう一方の子どもが泣き始め、最後 には二人同時に泣くということが起きた。そのまま続けてはみたが同じようなことが繰り 返し起き、プレパレーションの導入が困難だった。また、初めて会う人や環境から人見知 りや場所見知りをする子どもも見られたため、個別に関わり、不安や恐怖心を軽減し、対 象児の状態の詳細な把握や信頼形成の重要性が改めて明確になった。今回は舌圧子と聴診 器に焦点をあてたため、アイスの棒のツールとアンパンマン付き聴診器を用意したが、予 備実施の際、人見知りや場所見知りをし、プレパレーション開始時から言動に不安が見ら れ、実施が困難だったことから、二回目の小児クリニックで行った本実施では人見知りを しないよう事前に軍手人形を用意し、子どもとコミュニケーションを取ることから始め、 壁画を指さす等、少しでも場所に対する恐怖心を払拭することを考慮した。その結果、予 備実施と本実施の際の子どもの様子を比べると、学生の話をよく聞き反応していたり、そ の後の診察時にも自ら口を開けアイスを食べようとする姿や自ら手をバンザイする姿が明 確に見られた。このようなことからもプレパレーションの導入のタイミングや事前のアセ スメントにより、個々の対象児に合わせた対応が求められる。

実施後、診察がスムーズになるためと、医師がアイスの棒の舌圧子とキャラクター付きの 聴診器を継続し使用していた。

後日、医師から「プレパレーションの効果は確実にありました」とメールを頂いた。これは、現場での実用の可能性が大いに示唆されたと言える。

参考文献

1) 小山 正 『初期象徴遊びの発達的意義』 特殊教育学研究, 50(4), 363-372,2012

本研究では、乳幼児における外来でのプレパレーションに視点をあてた。

予備実施では、男女児 3 人にプレパレーションを実施した。「アイス」「アンパンマン」など子どもになじみのあるものを用いたツールを使用したごっこ遊びでのプレパレーションの為か A 児 B 児の 2 人は楽しんでごっこ遊びをしていた。C 児はブロックで"遊びたい欲"が強かった。人見知り、場所見知りから学生が提案したごっこ遊びには興味を示さずブロックで遊びたい思いを暴れることで表現した。それにより、プレパレーションは中断し、この後の内容を示すのみとなった。A 児 B 児は診察室に入った後も笑顔でアイスを選んだり、洋服を上げようとしたり、普段の診察時に比べ積極的に受診する様子がみられた。また、医師役も口をさらに開けてほしいことを「もっとお口開けないとアイスいっぱい食べられないよ」と伝えたことにより、A 児は素直に大きな口を開けることができ、プレパレーションの有効性が示された。C 児は診察室入室すぐに暴れだし拒絶した。実施後の保護者へのアンケートで先日、予防注射をしていたことがわかった。その嫌なイメージが残っていることにより、「病院」という空間に拒絶したのだろう。

クリニックでの本実施では、予備実施での反省から、軍手人形を使用したり、子どもの 洋服にあるキャラクターに触れたりなど、子どもとコミュニケーションをとることからは じめた。さらに、F・G児の結果から一連のプレパレーションの効果は、側で見ている子ど もにも潜在的に影響を与える可能性も示された。姉妹であることからG児はF児の楽しそ うな様子に魅力を感じたのだろう。しかし、D児E児では双子特有の嫉妬心の現れもあった。 このような結果から、人見知りや場所見知り、感情、兄弟構成など対象児の状態の詳細な 把握が不可欠であることが明確になった。

プレパレーション後の診察では、自ら口を開けたり、手をバンザイするといった積極的な受診が見られ、プレパレーションの有効性が確認された。

象徴機能の成立に合わせたアイス屋さんやお医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わりが効果の発揮に繋がったものと考えられる。

また実施の際は、子どもの注意集中が途絶えないよう個人に行うことの重要性も示された。そのような中でも、子どもの不安定さが見られた場面もあったことから、プレパレーションの導入のタイミングや事前のアセスメント、対象児に合わせたアイス屋さん・お医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わりをすることで、より効果的なプレパレーションが可能になるものと考える。

今後の課題として、プレパレーションで使用するツールを増やすことや、兄弟は必ずしも同じ空間でプレパレーションを行ったほうがより効果的であるのか否か、病院の空間としてキャラクターの壁画は有効的なのかといった本研究での疑問を追及していきたい。

【個人考察】 15K-0016 渡辺 夏奈

本研究では、乳幼児における外来での痛みを伴わない診察に対するプレパレーションを考え効果があるか検討した。アイス屋さんごっこやお医者さんごっこと子どもが好きな物やキャラクターを使用し保育士の専門性を生かしたプレパレーションを考えツールを用意した。

予備実施を3名の男女児に行った。A児B児はプレパレーションの道具に興味を示しプレパレーションを楽しんで行うことができた。口内視診ではアイスを選び、口を開け上手に診察を受けた。聴診の際にもアンパンマンに興味を持ち静かに受診することができ、B児においては自ら服を上げる様子も見られた。A児B児共に普段の様子に比べて積極的に診察を受けることができた。このことによりプレパレーションは有効である可能性が示された。一方C児は場所見知りや人見知りにより予定のプレパレーションを行うことができず、C児の興味の持った玩具で遊びながら今後の流れについて声を掛けるのみとなった。C児は診察室に入る際泣き、口内視診、聴診に拒否を示した。実施後C児は2週間前に予防接種を受けていると分かった。普段の病院とは違い車の玩具で楽しそうに遊んでいたが、病院だと気づき診察時に拒否を示したのだと考える。このことによりプレパレーションは場所見知りや人見知りを考慮し子どもが興味の持てる導入をすることが重要であると考える。

小児科クリニックでの本実施では、予備実施での結果から考えプレパレーションの導入に軍手人形を使用し、子どもと楽しく関わり始めると不安気な様子から少しずつ安心し表情が和らぐ様子が見られ学生に注目させることができた。D・E 児は双子である。1 人ずつ行うため D 児にプレパレーションを行う。しかし E 児が泣き始めると集中が途切れてしまう。E 児は場所見知りや人見知りによりプレパレーションを拒否したが母親に抱かれ隔離室から出ると泣き止んだ。D 児がプレパレーションを行う際母親に抱かれていたため嫉妬心があったのではないかとも考える。一方F・G 児は姉妹である。F 児は意欲的にアイス屋さんごっこを行い、聴診器を上手に使って楽しそうな様子でプレパレーションを行っていた。F 児の妹である G 児は姉の楽しそうな様子に魅力を感じたのか側でプレパレーションを見ていた。G 児は F 児の楽しそうな様子から興味をもったのだろう。H 児は隔離室に入ると表情が強張ったがアイスや聴診器のドキンちゃんに興味を示し学生の話をしっかり聞いていた。

プレパレーション後の診察では、子どもの身体を抑えなくとも自ら口を開けたり、手を バンザイする、といった積極的な受診が見られ、プレパレーションは有効である可能性が 示された。全ての結果から、人見知りや場所見知り、感情、対象児の状態の詳細な把握が 重要であることが分かった。また結果から一連のプレパレーションの効果は、側で見てい る子どもにも潜在的に影響を与える可能性も示された。

象徴機能の成立に合わせたアイス屋さんやお医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わり が効果の発揮に繋がったものと考えられる。また実施の際は、子どもの注意集中が途絶え ないよう個人に行うことの重要性も示された。そのような中でも、子どもの不安定さが見 られた場面もあったことから、プレパレーションの導入のタイミングや事前のアセスメン トでラポール形成を行い、対象児に合わせたアイス屋さん・お医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わりをすることで、より効果的なプレパレーションが可能になるものと考える。今後はさらに現場でも実践できるよう対象児を増やし検討を行い、有効性を明確にすることが重要であると考える。また保育士は子どもの権利を守る大切な役割があることを伝えていき、医療の現場で子どもの最善の利益を考える一員であることを広め、子どもの権利を守る実践に繋げることが重要である。そのため保育士の専門性を生かした様々な医療現場での子どもとの関わりをこれからも追及していきたい。

7. 結論

痛みを伴わない処置に対しても、子どもの状態を考慮してプレパレーションを行う ことの有効性が示唆された。

8. 謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた卒業論文指導教員の酒井博美先生に感謝を致します。また、研究の実施にあたりご協力頂いたクリニックの皆様、地域の保護者の皆様、地域の保育園の皆様、共立女子大学助教授の上出香波先生、こども心理科担任の細川いづみ先生に感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

9. 参考文献

- 1)保育所保育指針解説 第1章総則 2 (4)
- 2) ナノナース 看護実習お役立ちサイト > 小児科 > プレパレーション・ディストラクション
- 3) 主任研究者 鴨下 重彦 『プレパレーションの実践にむけて-医療を受ける子ども へのかかわり方-
- 4) 著/小口尚子・福岡鮎美『子どもによる子どものための「子どもの権利条約」』第25 条 小学館
- 5) 保育所保育指針 第6章
- 6) 半田浩美 蝦名美智子 二宮啓子 片田範子 勝田仁美 筒井真優美 飯村直子 込山洋美 鈴木敦子 楢木野裕美 村田恵子 中野綾美 戈木クレイグヒル滋子 『「子ども へ検査・処置について説明を行うこと」に関する文献検討』
- 7) 第23回 日本小児外科 QOL 研究会 日小外会誌 第49巻1号『東日本大震災の教訓:被災地の拠点病院として』石巻赤十字病院名誉院長 飯沼一宇 2013年2月

10. 図 表



(図1) アイス屋さんごっこのツール



(図2) アイスさんごっこの様子



(図3) お医者さんごっこで使用したツール



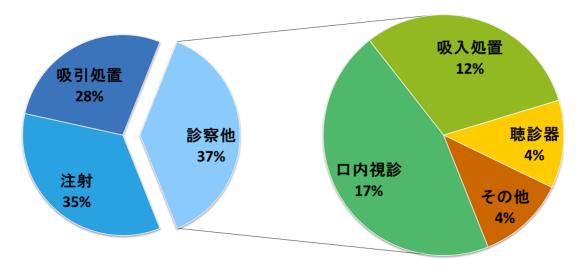
(図4) お医者さんごっこの様子



(図5) アイスを腕につけている様子

(図6) 軍手人形





(図7) アンケート結果



(図8-1) A 児の様子



(図8-2)



(図8-3)



(図 9 - 1) B 児の様子



(図 9-2)



(図 9-3)



(図10-1) C児の様子



(図10-2)



(図10-3)

11. 要約

本研究の目的は、保育士の専門性を生かした乳幼児の診察のためのプレパレーションが小児の不安や恐怖、ストレス軽減に効果的か検討することである。診察が苦手な1~3歳を対象とし、予備実施を経て、本実施を行った。実施内容は象徴機能の発達に合わせたごっこ遊び、子どもになじみのあるツールを使用し、診察前の時間にプレパレーションを実施し、子どもの診察時の様子を検証した。その結果、普段の診察時の様子に比べ、積極的に受診する様子がみられた。また、人見知りや場所見知り、感情など対象児の状態の詳細な把握が不可欠であることが明確になった。

プレパレーションの導入のタイミングや事前のアセスメント、対象児に合わせたアイス屋さん・お医者さんの見立て・ごっこ遊びでの関わりをすることで、より効果的なプレパレーションが可能になるものと考えられる。

一連のプレパレーションの効果は、側で見ている子どもにも潜在的に影響を与える 可能性も示された。